

## 社会的文脈間における自己の一貫性について — 「本当の自分」が現れていると感じることとの関連から —

田 島 司

Social context and self-consistency: “true self” as consciousness of subjectivity

TAJIMA Tsukasa

### 要 旨

現代社会で生活する際には、状況に合わせて自己を変化させる必要が生じる。これは外的な環境に適応するという観点からの要請である。一方で、自己が場面間で矛盾無く一貫し、安定的に主体性を自覚することも求められている。これは内的世界の安定的な構築という観点からの要請である。これらの課題について現代社会の自己がどのように対応しているかを調査した。その結果、「本当の自分」が現れていると感じることを伴う主体性は私的な場面で強く自覚されており、そのような自己を公的な場面にまで維持させることで自己の一貫性を得ていると考えられる結果が得られた。

### 問 題

人は、様々な場面や状況に合わせて複数の自己を使い分けることができる。学校や仕事場での振る舞いと、家族や友人との団らんにおけるそれとが大きく異なり、別の人格のように感じられることも珍しくはないであろう。この点から言えば自己は状況との関わりにおいて生じるものであり、状況が変われば自己も変わり、状況の数だけ自己が存在するといつてよいであろう。James(1890)は、自己の形成が個人内で独立して行われるのではなく、他者との相互作用の中で構成されるということを前提としていたようであり、自分のイメージを抱いている他者の数だけ人は自己を持つとして、これらを社会的客我(social me)とよんだ。つまり、相互作用する他者との間に自己が生じ、異なる他者とは異なる相互作用をするために、生じる自己は他者の数だけ増えることを示唆したのである。生活する社会的環境が複雑な現代社会においては、外的環境に適応しようとするれば自己が多面化することは必至であろう。

他者に対して呈示する姿だけでなく、同時に自己自身に感じられる自己の姿も、状況と同時に変化するものであり、これも多くの研究によって明らかにされていることである。例えば、Morse & Gergen(1970)は、同席した他者が好印象を与える人物であった場合に、被験者は自尊心を低下させ、他者が否定的な印象を与える人物であった場合には、自尊心を上昇させることを明らかにしている。また、Alexander & Knight(1971)の状況的アイデンティティ(situated identity)、Markus(1986)の作動自己概念(working self-concept)などの概念も、状況によって変化する自己の側面を描き出している。

現代社会における個人は、複数の集団に所属し、社会的関係が交錯するという複雑な環境におかれており、それぞれの環境で生じる自己の多面性が現代に特有の傾向とされてきた。個人が関わる社会的場面の複数化や、場面に依存して変化する自己の姿は、現代的な自己を扱う多くの理論の中で扱われている。例えば、Riesman(1961)の他者指向的性格、Zurcher(1973)の柔軟な自己(mutable self)、Berger, Berger, & Kellner(1973)の社会的な生活世界の複数化などの議論がそれに当てはまるものといえよう。いずれの議論でも、現代社会の複雑化に適応しようとする自己の姿が描かれている。

複数の自己が存在しているということは、当該の状況に合わせて環境に関わることが可能であり、外的な社会的環境からの要請に適応えられるという点で適応的であると思われる。しかしながら、状況に合わせて自己を複数化して対応することは、環境に働きかける主体的な存在としての自己をいかに構築し、それを顧みるかという、いわば内的世界の安定的な構築という要請に関しては必ずしも十分に応えられていないように思われる。個人内での自己の表出の仕方が多様になったことは現代社会の特徴と言えるであろうが、そのことは、自己の完全なる断片化や寄せ集めの状態が個人に受け入れられていることを必ずしも意味するわけではないのである。そこには、「本当の自分」、「自分そのもの」などのように感じられ、自己の行動を生起させたり方向づけている個人の主体性そのものと自覚される側面があり、それが複数の場面間で矛盾無く一貫し、安定的なパーソナリティとして自覚できるよう求められていると考えられる。かつてErikson (1959) が、アイデンティティを定義する際に重要な要素として斉一性 (sameness) と連続性 (continuity) をあげ、そのように自己が統合されていなければアイデンティティ混乱に陥ることを指摘したように、これは自己やアイデンティティというキーワードを論じた研究の中で中心的問題として古くから扱われている。

自己が一貫した自己を感じようと求める動機については近年でも議論されている。Gecas (1991) は、社会学でのアイデンティティに関する研究と心理学での自己概念に関する研究を概観した上で、自己の意味や一貫性、自己理解を求め、リアルに感じる自己の核心部分を維持しようとする自己動機 (self-motive) が存在することを仮定し、その動機が満たされる時の感覚を本来感 (authenticity) とよんだ。そして、ルネッサンス時代の作家やシェイクスピアの文章にも、本来感を求める心情を表現したものがあることなどをあげ、本来感を求めるのが現代社会に限らない普遍的な動機であるとした (Gecas, 1994)。また、現代社会は自己の一貫性を容易に得られるとは言い難く、本来感を得るのは困難を伴うため、それを得ようとするために社会環境を変革する可能性もあることを指摘した。さらにHarter (1999) も、本来の自己と感じる意見や行動を表出することの重要性を指摘している。人は幼児の頃から本来の自己と異なる意見や行動を表出することがあり、生涯をとおしてみられることが認められているが、中でも特に、青年期以降の特に女性にとって、本来の自己を表出できないことは重大な問題であり改善すべきこととして扱われている。

近年のわが国において、本当の自分を感じる事の重要性に関する実証的な検討を行ったものとしては伊藤・小玉 (2005) の研究がある。彼らは、心理臨床の領域やポジティブ心理学において、適応的という観点から本来感というものが重要であるととらえられていることを紹介しつつ、この概念を実証的に検討することの重要性を指摘し、本来感を測定する尺度を構成している。大学生を対象とした調査の結果、「いつも自分らしくいられる」などの項目で測定される、いわば生活全般における本来感を感じていることが、抑うつや不安の低さ、人生に対する満足、心理的ウェルビーイングに肯定的な影響を与えていることを明らかにした。

状況に合わせて自己を変化させることは外的環境への適応の点から求められるが、一方で、状況の変化にとらわれず自己を一貫させることも、内的世界の構築という点からは望まれることであり、心理的なウェルビーイングがもたらされることもある。これらは一見すると相矛盾するが、いずれか一方しか成立しないものであるのか、それとも、何らかの仕組みによって両立、統合が行われる場合もあるのであろうか。

1つの解決策として、職業などのような、社会から要請される役割等に自己を同化させ、それを様々な他の場面にまで維持して一貫性を保つということが考えられる。客観的にみれば他者から与えられた規範に同調する行動であっても、それに同化して、その主体的行動を本当の自分の意思によるものと感じるようになることは珍しくはない。このことは古くから社会心理学者の関心を集め、態度変容研究や役割取得過程の研究、内発的動機づけに関するものなど多くの研究によって確認されてきたことである。また、このような、目的や規範、役割等の同化は一時的なものではなく、ある程度の期間は維持すると考えられて

いる。Turner (1978) は、職業行動時の態度などを、適切でない状況であるはずの家庭や近所付き合い時などにまで維持させたり、退職後も仕事の態度や行動を維持させることがあると指摘している。それは価値の高い役割の場合だけでなく、価値の低い役割であっても維持される場合があるという。当該の役割の遂行が適切でないと考えられる状況にまで持ち込まれることは、役割と自己とは融合( role-person merger )しつつ他の場面にまで自己が一貫することを示している。

しかし、現代社会の特徴として、職業行動等の中に本当の自分が見いだせなくなったことを指摘する議論は少なくない。例えばBerger, Berger, & Kellner( 1973 )は、工業生産が近代社会の重要な特徴であることを指摘し、そこに従事することは、機械的工程の一部分となることであり、類似の訓練を受けた者によって代替しうるものであるという。また、仕事量は量化可能な基準によって評価されるが、目前の作業が全体として何の目的に沿っており、最終的にどのような生産をもたらすかという関係性が不明確であるという。これらのことが、仕事の上での自己を非個人的な機能者としてとらえさせ匿名化させ、そこでの自己は現実性が弱いと感じられるため、主観的に自己自身を確認することができない「疎外」を体験するというのである。

Turner( 1976 )の指摘もこれに重複するところが多く、「本当の自分」、「自分そのもの」という感覚を伴う側面を自己観念( self-conception )とよび、以前は、規範、価値、理想などに同調し、自己統制によって達成を目指す文脈、すなわち「制度」の文脈に自己観念が見いだされていたのに対して、効率的な生産拡張という社会の志向が薄らぎ、規律や愛他精神などの価値観もその根拠となる生産活動の重要性が低下したことから、自己観念は「衝動」の文脈で、すなわち、制度に基づく規範、価値、理想などにとらわれず、その意味で社会的でないともいえる感情や行動を解放する中に見出されるようになったと指摘する。

さらにZurcher & Wood( 1988 )は、現代社会における新しい自己が現れた背景には、新技術が登場したことや、農業、工業従事者の割合が減少しサービス業等の第三次産業が発展したことがあり、コンピュータを初めとする進歩の速い新技術や、量より質を求めるサービス業は、現代社会の仕事の仕方や態度、人間関係などを大きく変える原因となり、その結果として、「衝動」と「過程」すなわち、それ自身の発展と実現以外に目的のない行動に特徴づけられる自己へと移行したという。

以上のような議論はいずれも「制度」の文脈である産業組織等そのものに変化が生じ、そこに自己を重ね合わせることができなくなったことを指摘している。それ故に、この方略によって複数の場面に一貫する自己を維持していくことは困難になったと考えられるのである。

そこで、もう一つの解決策として、「衝動」の文脈において本当の自分だと感じる個人的主体性を、他の場面に持続させることで一貫性を得る方略が考えられる。個人的主体性の自覚は、規範など他者や集団という自己以外の主体からの要請に対して必ずしも同調しない場合に感じやすいはずである( Turner, 1976 )。これは、例えば一人で過ごす自由な時間や、家族や親しい友人との団らんなどの私的な場面であろう。このような場面では、強い規範から自己の行動を規定されず、自由にのびのびと行動しやすいだけでなく、他者からの要請に抗うことも工作中などに比べれば容易にできる場合が多い。そこで感じられる個人的主体性を「制度」の文脈にまで持続することによって、一貫性のある本当の自分を強く感じられるはずである。

以上の議論をもとに、現代の大学生を対象として、「衝動」の文脈で感じられる自己から拡張して一貫性を保つことが、本当の自分が現れていると感じることと関連しているかを以下のような調査によって検討した。

## 方 法

調査対象者は私立大学生の女性98名。講義の時間を利用して質問紙を配布し回答を求めた。質問項目は

以下の3つの項目群から構成されている。

まず、「各場面に現れる本当の自分」は以下の4つの場面について測定した。「『制度-個人的』に現れる本当の自分」「具体的な仕事や勉強、練習などを一人でがんばっている時に、どの程度本当の自分が現れていると感じますか」、「『制度-対人的』に現れる本当の自分」「具体的な仕事や勉強、練習などを仲間とやっている時に、どの程度本当の自分が現れていると感じますか」、「『衝動-個人的』に現れる本当の自分」「一人で自由に好きなことをしている時に、どの程度本当の自分が現れていると感じますか」、「『衝動-対人的』に現れる本当の自分」「自分の気持ちを隠さずに他者と接している時、どの程度本当の自分が現れていると感じますか」。以上はそれぞれ5件法（0：全く感じない～4：非常に感じる）で回答させた。

次に、「各場面における性格特性」の測定は、和田（1996）のBig Five尺度に基づいて性格特性語20対を用いた。本当の自分がどのような性格であるかを、4場面それぞれについて7段階のSD法で測定した。

さらに、「他の場面での自己が現れていると感じる程度」の測定は以下のような4種である。「制度-個人的」から「衝動-個人的」へ「一人で自由に好きなことをしている時に、具体的な仕事や勉強、練習などを一人でがんばっている時の自分があらわれていると感じますか」、「衝動-個人的」から「制度-個人的」へ「具体的な仕事や勉強、練習などを一人でがんばっている時に、一人で自由に好きなことをしている時の自分があらわれていると感じますか」、「制度-対人的」から「衝動-対人的」へ「自分の気持ちを隠さずに他者と接している時に、具体的な仕事や勉強、練習などを仲間とやっている時の自分があらわれていると感じますか」、「衝動-対人的」から「制度-対人的」へ「具体的な仕事や勉強、練習などを仲間とやっている時に、自分の気持ちを隠さずに他者と接している時の自分があらわれていると感じますか」。これらの項目群は、それぞれ5件法（0：全く感じない～4：非常に感じる）で回答させた。

## 結 果

本当の自分を感じる程度を場面間で比較するために、「各場面に現れる本当の自分」で測定された値を従属変数として2（文脈：制度・衝動）×2（社会性：個人的・対人的）の2要因分散分析を行ったところ、「文脈」の主効果( $F(1,97)=45.41, p<.01$ )、および「社会性」の主効果( $F(1,97)=67.61, p<.01$ )が有意であり、「制度」よりも「衝動」の方が有意に高く、「対人的」より「個人的」の方が有意に高かった（「制度-個人的」： $M=2.88, SD=0.92$ 、「制度-対人的」： $M=2.25, SD=0.92$ 、「衝動-個人的」： $M=3.57, SD=0.78$ 、「衝動-対人的」： $M=2.57, SD=0.96$ ）。下位検定の結果、すべての水準での単純主効果が有意であった（ $p<.01$ ）。

「各場面における性格特性」で測定された20対の性格特性を因子分析したところ、固有値は4因子解で1.08、5因子解で0.49であり、寄与率は第5因子が2.45%と低かったため、単純な因子構造で解釈できた4因子解（プロマックス回転）を採用した。第1因子は“話し好き”に代表される「外向性」、第2因子は“悩みがち”に代表される「神経症傾向」、第3因子は“いい加減な”に代表される「誠実性」、第4因子は“独創的”に代表される「開放性」とした。従来のBig Fiveにおける第5因子の項目はすべて今回の第1因子に含まれ、第2因子から第4因子は従来通り（和田、1996）の項目構成であった。

「他の文脈での自己が現れていると感じる程度」を場面間で比較するために、この値を従属変数として2（文脈方向：制度→衝動・衝動→制度）×2（社会性：個人的・対人的）の2要因分散分析を行ったところ、「社会性」の主効果( $F(1,97)=12.13, p<.01$ )、および交互作用( $F(1,97)=8.82, p<.01$ )が有意であり、下位検定の結果、「対人的場面における衝動→制度」( $M=2.12, SD=1.08$ )よりも「個人的場面における衝動→制度」( $M=2.86, SD=1.17$ )の方が有意に高いという単純主効果がみられた( $F(1,97)=19.96, p<.01$ )。

次に、制度と衝動のいずれの文脈から他方に自己が一貫することが本当の自分を感じる程度の高まりと関連するかを検討するために、3つの要因間(「本当の自分を感じる程度」、「制度→衝動」、「衝動→制度」)における偏相関係数を、制度と衝動、対人的場面と個人的場面の別に算出した。その結果、個人的場面においては、「制度」の文脈での自己が「衝動」に現れている程度と「衝動」に感じる本当の自分の程度との間に正の関係があり、対人的場面においては、「衝動」の文脈での自己が「制度」に現れている程度が、「制度」に感じる本当の自分の程度と、「衝動」に感じる本当の自分の程度との間にそれぞれ正の関係がみられた (Table)。

Table 本当の自分の程度と他の文脈から自己の拡張との関わり (偏相関)

	制度に感じる本当の 自分の程度	衝動に感じる本当の 自分の程度
個人的場面		
“制度”の文脈での自己が “衝動”に現れている程度	.05	.23 *
“衝動”の文脈での自己が “制度”に現れている程度	.12	-.05
対人的場面		
“制度”の文脈での自己が “衝動”に現れている程度	.10	.12
“衝動”の文脈での自己が “制度”に現れている程度	.27 **	.25 *

\* p<.05  
\*\* p<.01

どのような性格特性の個人が文脈間での一貫性の程度が高いかを検討するために、個人的場面と対人的場面別に、制度と衝動で本当の自分を感じる程度がいずれも中央値以上の者(「一貫的自己群」と中央値未満の者(「非一貫的自己群」とを分け(いずれの場面でも高群52名, 低群46名), 性格特性の4つの因子の得点を従属変数としたt検定を制度と衝動の文脈ごとに行った。その結果, 「衝動-個人的」における性格特性の第4因子( $\chi(96)=1.79, p<.05$ )に有意な差があり, 「一貫的自己群」の方が独創的などの特徴があることが明らかになった。また, 「衝動-対人的」における性格特性の第1因子( $\chi(96)=1.87, p<.05$ ), 第2因子( $\chi(96)=1.84, p<.05$ ), 第4因子( $\chi(96)=1.86, p<.05$ )に有意な差があり, 「一貫的自己群」の方が話し好きで, 悩みにくく, 独創的などの特徴があることが明らかになった。

### 考 察

「制度」よりも「衝動」の場面で本当の自分を強く感じるという傾向は, Turner(1976)の指摘に沿うものであり, 田島(2006)の結果とも一致している。また, 対人的場面よりも個人的場面において本当の自分を強く感じるという傾向は, 船津(2006)が現代の日本の大学生を調査対象とした結果をもとに, たとえ親密な他者との関係であっても本当の自分を見出すことができなくなってきていると指摘する現象の一端がここにも現れているといえる。

他の文脈での自己が現れていると感じる程度が個人的場面において高く, 特に, 対人的場面における衝動の自己よりも個人的場面における衝動の自己が他の文脈にまで維持される程度が強かったが, これが直接に本当の自分を感じる程度と関連を持っているわけではなかった。



個人的場面において、「制度」の文脈での自己が「衝動」に現れている程度が「衝動」に感じる本当の自分の程度と正の関係にあり、「制度」に感じる本当の自分の程度と無関係であった理由は明らかではない。「制度」と「衝動」で感じる本当の自分の程度がともに高い群の個人的場面における「衝動」の文脈で、独創的などの性格特性上の特徴があったことから、独創性を必要とするような、例えば一人で行う趣味等の有無が個人的場面における自己の一貫性に関連している可能性が考えられるが、本当の自分の程度と正の関係にあったのが「制度」の文脈での自己が「衝動」に現れている程度であったことについてなど詳細な検討が必要である。

対人的場面において、「衝動」の文脈での自己が「制度」に現れている程度が「制度」および「衝動」に感じる本当の自分の程度と正の関係にあったことは、本当の自分を感じやすい「衝動」から「制度」へと一貫することで本当の自分を感じる程度が一層強まっているという考えを支持するものである。これが現代の日本の女子大学生に限った現象であるかどうかは確認が必要である。また、「制度」と「衝動」で感じる本当の自分の程度がともに高い群の対人的場面における「衝動」の文脈で、話好き、悩みにくい、独創的などの性格特性上の特徴があったことは、このような性格特性が「制度」の文脈にまで一貫させやすいものであり、それが現代社会における自己の一貫性に肯定的な効果をもつことを示唆しているといえよう。

「衝動」の文脈における本当の自分と感じやすい自己を「制度」の文脈に一貫させようとする例は、さまざまな場面で生じているように思われる。例えば、近年、インターネットでの大学新卒者向け就職情報サイトでは、希望の就職先を探し出すためのキーワードによる検索サービスが充実している。キーワードとして「さんづけ」と入力してみると、上司であっても肩書きではなく「さんづけ」で呼び合うことを売り文句にしているかなりの数の企業が選出されるのである。就職時に「制度」の文脈での適切な言葉遣いへと切り替えるのではなく、「衝動」の文脈での他者への接し方を維持させたまま企業で働くことが魅力的に感じる大学生が多いことを物語っているように思われる。

また、「友達親子」と表現される親子関係が現代の特徴であるとされて、その是非等が論じられることがある。「友達親子」とは、一般的には、親子の境界が無く、子を甘やかしている友達のような親子関係を指すと言われているが、滝井(2006)によれば、実際には子へのしつけは厳しく、母親としての役割(上下関係)という側面を持ち合わせていることが「友達親子」の特徴であるという。つまり、友達親子とは、「制度」の文脈をなくしてしまっただけではなく、役割関係のある「制度」の文脈に、友達という「衝動」の文脈でのつきあい方を持ち込んでいるのである。これも、「衝動」から自己を一貫させている例であるといえるのではないだろうか。

しかし、上述したような「衝動」から維持される自己は社会性のある役割を伴ったものではなく、単なる自己自身にのみ自覚される個人的な主体性でしかない。従って、一貫させることによる本当の自分の安定性は得られても、社会の中で有意義なものとして定位される側面を含めて自己に統合させるという問題は解決されていないままであると思われる。

#### 引用文献

- Alexander, C.N. & Knight, G. 1971 Situated identities and social psychological experimentation. *Sociometry*, 34, 65-82.
- Berger, P., Berger, B., & Kellner, H. 1973 *The Homeless Mind: Modernization and Consciousness*.
- Irvington. [高山真知子・馬場伸也(訳) 1977 故郷喪失者たち—近代化と日常意識 新曜社]
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the Life Cycle*. Psychological Issues, 1, 1-171. [小此木啓吾(訳) 1973 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房]

- 船津衛 2006 コミュニケーションと社会心理 北樹出版
- Gecas, V. 1991 The self-concept as a basis for a theory of motivation. In J.A. Howard and P.Callero( Eds. ) *The Self-Society Dynamic*. Cambridge University Press.
- Gecas, V. 1994 In search of the real self: Problems of authenticity in modern times. In G. M. Plat and C. Gordon ( Eds. ) *Self, collective behavior and society: Essays honoring the contributions of Ralph H. Turner*. JAI Press.
- Harter, S. 1999 *The Construction of he Self: A Developmental Perspective*. Guilford Press.
- 伊藤正哉・小玉正博 2005 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討  
教育心理学研究 53, 74-85.
- James, W. 1892 *Psychology: Briefer course*. Dover Pubns. [ 今田寛訳 1993 心理学 岩波書店 ]
- Markus, H. & Kunda, Z. 1986 Stability and malleability of self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 858-866.
- Morse, S.J. & Gergen, K.J. 1970 Social comparison, self-consistency and the presentation of self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 148-159.
- Riesman, D. 1961 *The Lonely Crowd; A Study of the Changing American Character*. Yale University Press.  
[ 加藤秀俊( 訳 ) 1964 孤独な群衆 みすず書房 ]
- 田島司 2006 現代の大学生における“本当の自分”の所在 日本社会心理学会第47回大会発表論文集  
250-251.
- 滝井麻友美 2006 現代の親子のカタチー友達親子の実態を探る  
[http://tatsuki-lab.doshisha.ac.jp/~statsuki/Thesis2005/05\\_takii.pdf](http://tatsuki-lab.doshisha.ac.jp/~statsuki/Thesis2005/05_takii.pdf)
- Turner, R.H. 1976 The Real self: From institution to impulse. *American Journal of Sociology*, 5, 989-1016.
- Turner, R.H. 1978 The role and the person. *American Journal of Sociology*, 84, 1-23.
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成 心理学研究,67,61-67.
- Zurcher, L.A. 1972 The mutable self. *Futurist*, 6, 181-185.
- Wood, M.R. & Zurcher, L.A. 1988 *The Development of a Postmodern Self: Computer Assisted Comparative Analysis of Personal Documents*. Greenwood Press.